

第七十一回 春から夏そして秋 (三)

八月になると合唱の季節になる。セミとカエルだ。セミは実はもつと早く五月頃に鳴き始めるエゾハルゼミというのがいる。ミイキンと長めに引っ張って鳴くのが特徴で夏のアブラゼミほど騒がしくない。私たちにはアブラゼミは気象予報士のような存在で、朝は涼しいなと思っただけでもジージジジと一斉に鳴き始めると、ほどなく強烈な暑さがやってくる。という気がしている。カエルも春先にゲロゲロとドスの聞いた声で鳴くのもいるが、夏のはもう少し軽くゲコゲコと鳴く。彼らも気象予報士で、ゲコゲコとくるとほどなく雨が振り始める。ような気がする。

畑の収穫もこの頃が盛りになる。食卓もそれに合わせて豊かになる。朝はサングラをつっかけて自家製のヨーグルトに添えるイチゴとブルーベリーを採ってくる。朝早く収穫したものは水々しい。それにミントを加えると目も美味しくなる。フェネルも意外と合う。朝採ってくるのは他にトマトとバジルがある。たつぷりのオリーブオイルにニンニクを刻んで入れてオリーブの香りとニンニクの香りが立ち始めたらたつぷりの刻んだトマトを加えると乳化してとりとする。それに昨夜の冷やご飯を加えてリゾット風に。最後に刻んだバジルを加えると完璧だ。新じゃがもこの季節。皮が柔らかいので茹でてそのまま食べる。と土の香りがする。キュウリも取り立ては包丁を入れると水がしたたる。キュウりを生のまま食べるとその水気で心なしか体がひんやりする。ナス、インゲン、カボチャなど、毎日、畑をのぞいて今日の料理を思い浮かべることが出来るのはこの季節の楽しみだ。そして、ご近所からのお裾分けの野菜が急に増えるのもこの頃だ。

八月はススキなどが背丈より高くなり、敷地のなかに確保した園路も草を掻き分けて行かなければならなくなる。なので、この頃の敷地の変化は意外と見落としている可能性がある。それでもはいろいろな植物がタネを蒔く準備に入るのはわかる。タネを蒔くタイミングは春から秋までそれぞれが他との競合を避けるようにバラバラなのだが、この頃、準備に入るのはススキやガマやアブラガヤが目立つ。単純に背が高いから園路を歩かなくてもわかるとうだけなのだが。ススキはうつつすら紫色をした穂がで始める。それが九月になれば綿毛をつけて白い穂になりいやが上にも秋を演出するのだ。ガマも独特の深い茶色の穂が目立つのだが、やがてそれもほころびができてそこから綿毛のついたタネを飛ばす様になる。アブラガヤは先端に茶色の穂をつける。その茶色い色と名前からして穂をすりつぶすと油が取れそうに思うが残念ながらそうでは無いようだ。背が高くて目立つといえばセイタカアワダチソウもそうだ。ただ、この頃はまだ蕾ができた頃で黄色い花が目立ち始めるのはもう少し先になる。

暑い日が続く夏バテ気味になるのだが、それでも、畑の向こうに青々と広がる草はらにススキの紫色やアブラガヤの茶色が刷毛で引いた様に浮かび始める景色をみていると、確実に季節は秋に向かって変わりつつあることがわかる。

